魔法のダイアリー　プロジェクト 活動報告書

報告者氏名：早淵　裕美　　所属：茨城県立勝田特別支援学校　　記録日：平成 31 年２月 10 日

キーワード：コミュニケーションの補助

【対象生徒の情報】

- **学年**　　生徒Ｒ　高等部１年　16 歳
- **障害名**　知的障がい・注意欠損多動性障がい（AD/HD）
- **障害と困難の内容**

▼学年の友達の前で発表するなど，自分が注目される場面では，うつむき，話ができなくなってしまうことがある。

▼課題が難しいなど困った時に，自分から教師に助言を求めることが難しい。

写真①　タブレットを操作する様子

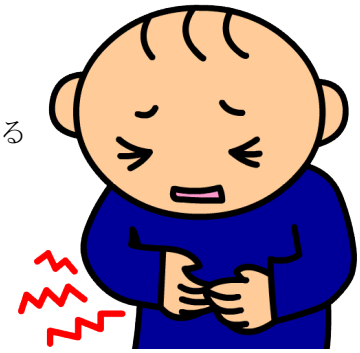
【活動進捗】

〇当初のねらい（計画書の学習目標）と活動による方向性の確認状況

・困ったエピソード

１学期，授業中に腹痛を言い出せず，教師が「どうしたの？」と言葉をかけるまで辛い思いを我慢してしまうことがあった。

その都度，「授業中にトイレにいってもいいんだよ。」「お腹が痛くなったら先生にすぐ言うんだよ。」などと伝えているが，いざ困った時に自分から伝えることが難しかった。



このような実態から…

本人が困りを伝えやすいような方法を提示し，環境を整えていくことが必要なのではないか？

そのために…

生徒のできることを少しずつ増やし，自己肯定感を高めたり，解決の見通しや，助けの求め方を身につけていくことができるような支援を行う。

【今年度の目標】

〇自分の思いを教師や身近な人に伝えることができる。

教師をはじめ，身近な人とのやりとりを通して，思いが伝わることを実感し，自分から伝えてみようという気持ちがもてるようにしたい。具体的な取り組みとして，By Talk for school や写真を介して気持ちを表現したり，Drop Talk HD で作成したヘルプボタンで困りを伝え問題が解決できるような取り組みを行っていく。

【進路】福祉就労を目指していたが，一般就労も視野に入れて実習を行う予定である。

【活動内容と対象生徒の変化】

〇活動内容表

	気持ちを伝える	伝わるやりとり	伝え方を学ぶ	困りを伝える
６月 ７月	口頭でのやりとり By Talk for school 導入 〇スタンプ	写真 〇教師主導	３秒日記 〇教師が言葉を入れる	Drop Talk HD 〇ヘルプボタン
９月 10 月 11 月 12 月	継続	継続 〇生徒主導 〇家庭での活用	継続 〇自分で言葉を入れる 支援を減らす	継続 〇ヘルプボタン 支援を減らす 口頭でのやりとり Drop Talk HD 〇手順表の活用
１月 ２月	継続	継続		Drop Talk HD 〇実習の約束の確認

〇対象生徒の事前の状況

「困りを伝える取り組み」

困った時に教師に助言を求めることができず，活動がとまってしまうことがある。

〇活動の具体的内容

使用したアプリ	使用した時間帯	実施した頻度
DropTalk HD	生活単元学習 美術	随時使用

DropTalk HD のキャンパスをヘルプボタンとして活用しながら，気軽に教師に困りを伝えられる経験を重ねる。

過去の失敗経験からか，自分が「もしかしたら怒られるかも…」と感じる場面では正直に困りを申し出ることが難しい。６月から担任と一緒に学習する生活単元学習，美術の授業中に絞り，困ったときにはヘルプボタン（写真②）を押して教師を呼び，教師に聞かれたことを答えながら困りを探り解決していった。「教えてください」と音声が鳴るので，授業中わからないことがあったら抵抗なくボタンを押して教師を呼べるようになってきた。

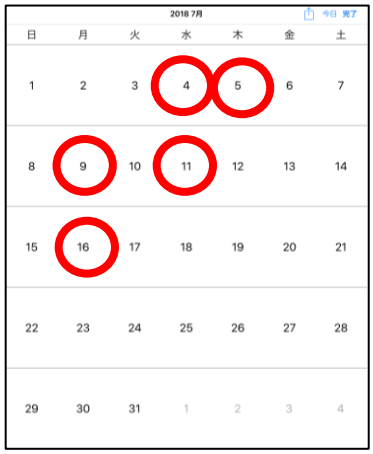
写真②　ヘルプボタン

わからないことは恥ずかしいことではないことや，忘れ物をすることは誰に

でもあることを伝え，自分から申し出ることができたときは称賛し，安心して困りを伝えることができるように学級で共通理解を図り支援をしている。言葉で伝えづらいことも，ボタンを押すことで助けてもらい，困りが解決したことで，もっと押してみよう！という前向きな姿につながったのではないか。

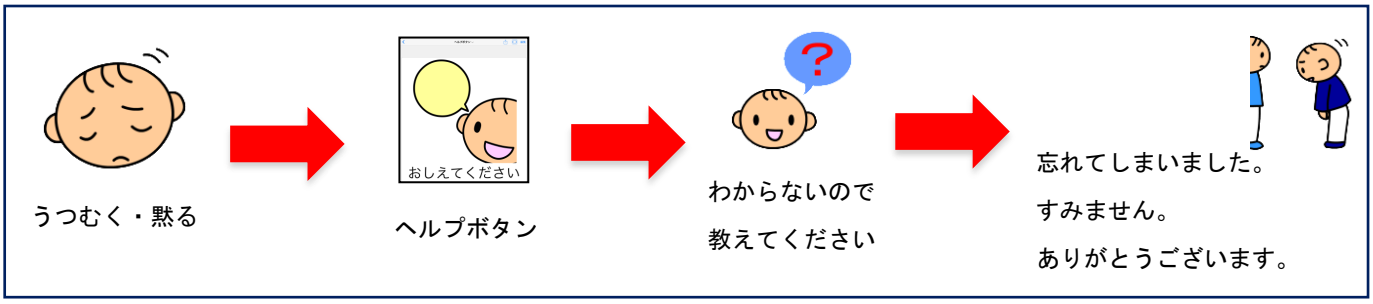
また，併せて言葉でも「わかりません。」忘れ物をした時は教師に「忘れました。」と言えるようになった。４月当初は，給食のマスクを忘れてしまったときは，自分から言い出せず，マスクを着用せずに給食当番をしようとしたことがあった。教師に指摘されると黙ってしまい，気持ちを切り替えるのに時間がかかった。

10 月に忘れてしまったときには，教師のところまで来て，「マスクを忘れてしまいました。すみません。」と謝ることができた。予備のマスクを貸し，正直に言えたことを称賛し，「明日は気を付けましょう。」と伝えると「はい。ありがとうございます。」とはっきり伝えることができた。失敗したときは，伝えることで困りが解決する経験を積んだことで，自分から申し出ることができるようになった。



写真③ 赤丸 １学期のヘルプボタンを使用した日▸

※６月 11 日～22 日まで校内実習期間



最初は言葉で伝えることが難しかったが，ヘルプボタンの介入を機に自分から困りを伝えることができるようになった。言葉で，「わかりません。」「忘れました。」と伝えられるようになった。困ったときのやりとりを繰り返すことで，「わからないので，教えてください。」「忘れたので貸して下さい。」「ぼくがやりました。ごめんなさい。」など状況に応じた言葉を使い，「困っているから～してほしい。」など自分の要求を伝えることができるようになってきた。

○対象児の事後の変化

困り感

・わからないことを伝えたら怒られるかもしれない。
・どうしたらいいかわからない。

→

Drop Talk HD を活用したコミュニケーション支援

・押せば先生が来てくれるから使いやすい。
・聞けばわからないことを教えてもらえた。

→

変化

・わからないことはいけないことではないのだ。
・聞いたら困っていることは解決することがわかった。

〇活動の具体的内容

「伝え方を学ぶ取り組み」

使用したアプリ	使用した時間帯	実施した頻度
３秒日記	帰りの会前の空き時間 帰りの会	週に２回程度

「伝え方を学ぶ３秒日記の活用」

３秒日記で，言葉の並べ方や伝え方を学ぶ。また，教師や学級の友達に伝える場を設け，自信をもつことができるようにする。

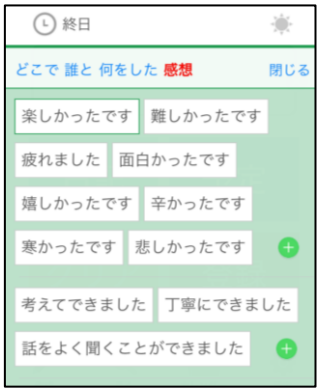
３秒日記は，予定や日記を言葉を選ぶことで書くことができるアプリである。７月から介入を始め，３秒日記を活用し，自分で言葉を選びながら１日の反省を書く練習をした。最初は，教師が前もって入れておいた言葉を選んで文を作っていた。「ぼくは体育で　バスケットボールをしました。がんばりました。」という文を作り，がんばったことを伝えようとしていた。慣れてくると「〇をしました。」と自分が行った活動に関して，音声入力を活用しながら自分で言葉を増やすこともできるようになってきた。自分で考えながら文を書こうとすると，動きが止まってしまうことが多々あるが，３秒日記は言葉を選ぶことで書けるので，「簡単に書けた。すげー。」と喜んでいる様子が見られた。「反省書かなきゃ！」と言いながら自分から３秒日記を書こうとする姿が見られるようになってきた。

写真④　帰りの会の発表の様子

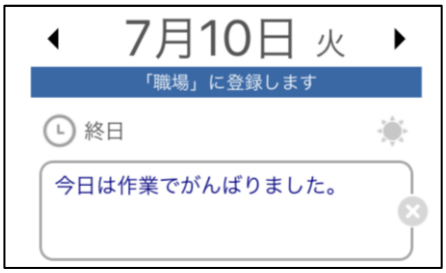
さらに，音声の読み上げ機能を使用し，作った文を聞いて確認し，後に続いて話す練習もしている。帰りの会で発表する際には，はっきり言葉を伝えることができるようになり，少しずつ自信がもててきた様子である。（写真④）

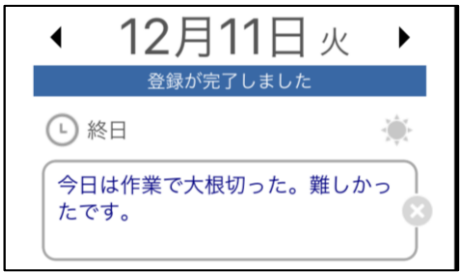
最初は，反省は日記を使っても，「がんばりました。」という表現を選びがちだったので，本人が話したい場面の写真がある場合には，「集中してるね。」「丁寧だね。」など教師が場面を形容しながら言葉を伝えていった。そうすることで，本人も教わった表現を使いながら反省を書くことができた。

２学期後半になると，３秒日記を使わず自分で考えた反省を伝えようとする様子が見られた。１日の反省を書くときに３秒日記で使用していた言葉を覚え，それらの言葉を使ってアプリを使わず自分で考えた反省を伝えることができた。３秒日記を活用したことで，言葉が増え，表現の幅が広がったようである。反省の場面だけでなく，作業学習でも，３秒日記で学んだ言葉を使いながら反省をすることができるようになった。

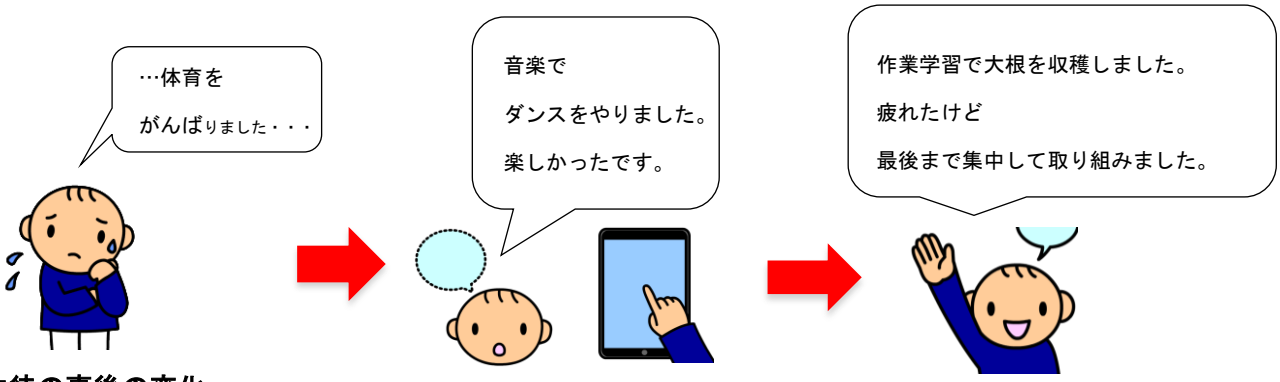


▲写真⑤　３秒日記のキャンバス





◂□写真⑥　対象生徒が書いた日記



○対象生徒の事後の変化

困り感	３秒日記を活用した コミュニケーション支援	変化
・友達の前で話すのは苦手である。	・読み上げ機能で文を聞いて確認できるから，わかりやすい。	・友達に反省を伝えることができた。

○対象生徒の事前の状況

「気持ちを伝える取り組み」

自分の気持ちが言えずに黙って俯いてしまうことがある。

使用したアプリ	使用した時間帯	実施した頻度
By Talk for school	授業の間の休み時間 帰りの会前の空き時	週に３回程度

○活動の具体的内容

「気持ちを伝えるＳＮＳの活用」

By Talk for school でのスタンプを活用したやりとりを通して伝わる経験をすることで，自分から気持ちを伝えようとすることができるようにする。

本人の話すことへの抵抗感を軽減するために，簡単なやりとりを行いながら，伝える楽しさを感じることができるような支援を行った。

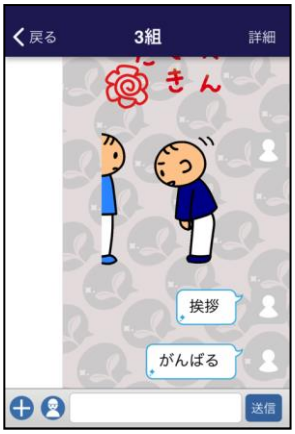
６月は，By Talk for School を使わずに，教師と口頭で授業の感想を伝えるやりとりを行った。「今日の１日の感想は？」と聞くと「うーん。」と悩みながらの答えが「作業学習で草取りをしました。がんばりました。」「体育で走りました。がんばりました。」といったように感想が毎日「がんばりました。」であった。

やはり言葉よりシンボルの方がわかりやすいのではと思い，７月に入ってから By Talk for school を使い，帰りの会前に１日の感想をスタンプで教師

写真⑦　ある日の１日の感想のやりとり

に伝えるやりとりを始めてみた。作業学習があった際は「疲れた」顔，保健体育など自分の好きな活動があった際には「楽しい」のスタンプを選んでいた。（写真⑦）イラストの表情がわかりやすいので，本人も自分と同じ気持ちのスタンプを選ぶだけなので，気軽に教師とやりとりをすることができたようである。スタンプにないことを伝えたい際には，文字で表現していた。また，教師が促さなくても自分から iPad を借にきて，スタンプを選び「うーん。」と考える様子が見られるようになってきた。

１学期の終業式では，学期の反省をスタンプで表し，２学期の抱負は音声入力で伝えることもできた。（写真⑧）



写真⑧　２学期の目標を述べるやりとり

介入前は，伝えたいことはあるが表現の仕方がわからず，「がんばりました。」と自分がわかる言葉で答えがちであったが，介入後は，「これだ！」とすぐにスタンプを選び感想を答える様子が見られ，表現の幅が広がったのではないか。

３学期のある日，校内・現場実習が終わり，学級で自分の実習日誌を読み返し，反省を行った。教師と一緒に日誌の「学校から」「職員から」のコメントを読んでいると，「集中して作業ができました。」「確認や報告がきちんとできました。」などと褒め言葉がたくさん書いてあった。

その日の帰りの会で「今日の気持ちを教えてね。」と伝えると，恥ずかしい顔のスタンプと，「せいたん」「はんせい」「うれしい」と単語を併用して伝えてくれた。（写真⑨）実習では，働く社会人を目指すため普段の授業より厳しく指導をされる中で，他学年の先生や施設の職員の方に称賛のコメントをもらうことができ，自分のがんばりが認めてもらえたという達成感から嬉しいという思いを感じたのではないか。

写真⑨　３学期の感想のやりとり

気持ちを伝えるやりとりを通して，フリック入力は時間がかかるので，音声入力を主に使用することが多かった。はっきりと発音することが難しいこともあり，入力をやり直さなければならないことも多々あった。やりとりにおいては，単語，絵文字，スタンプが中心であった。本人にとって使いにくさを感じる部分はありながらも，自分の気持ちを伝えやすく，相手の気持ちも目で見てわかるので，理解しやすくコミュニケーションがしやすいツールだったのではないか。

〇対象生徒の事後の変化

困り感

・何て伝えたらよいかわからない。

By Talk for school を活用したコミュニケーション支援

・イラストのスタンプだから伝えたい気持ちがイメージしやすい。

変化

・簡単に気持ちを伝えることができた。
・もっと先生に伝えてみたい。

〇対象生徒の事前の状況

「伝わるやりとりを重ねる取り組み」

授業で行ったことなどを聞かれ，言葉で伝えることが難しい。
自分の考えを言葉で伝えることが難しい。

使用したアプリ	使用した時間帯	実施した頻度
写真	作業学習 帰りの会前の空き時間	随時使用

「伝わるやりとりを重ねる写真や動画の活用」

写真や動画を活用し，授業などの活動を思い出しながら教師に伝える。教師と写真を介しながらやりとりすることで，伝わる経験を多く積めるようにする。

作業学習の所属は，担任とは違う農業班である。「今日は何を植えてきたの？」と質問すると，「…。わかりません。」と答えることが毎回であった。作業日誌を手がかりと考え読み返しても，自分で書いた文字が読みづらかったりと出来事がうまく伝えられなかった。

写真なら活動が一目でわかるかもしれないと考え iPad を渡し，「何を植えたのかわかるように作業の写真を撮ってきて。」と伝えると，自分でサルビアの種の袋を撮影してきたり，ある日は，にんにくの皮むきの様子を一緒に作業している先生に撮影してもらい，何をしたかわかるような写真を撮ってくることができた。(写真⑩)

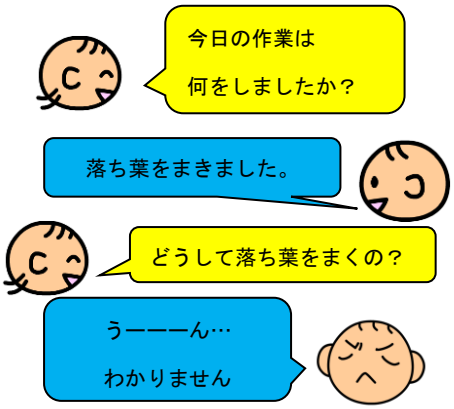
１学期は写真を教師と見ながら，「何を植えてるの？」「何をしているところ？」など，教師の質問に答える形でやりとりをしていた。２学期になると，自分から「先生，今日は〇してきました。」などと写真を見せながら説明してくれるようになった。

写真⑩　撮影してきた作業学習の様子

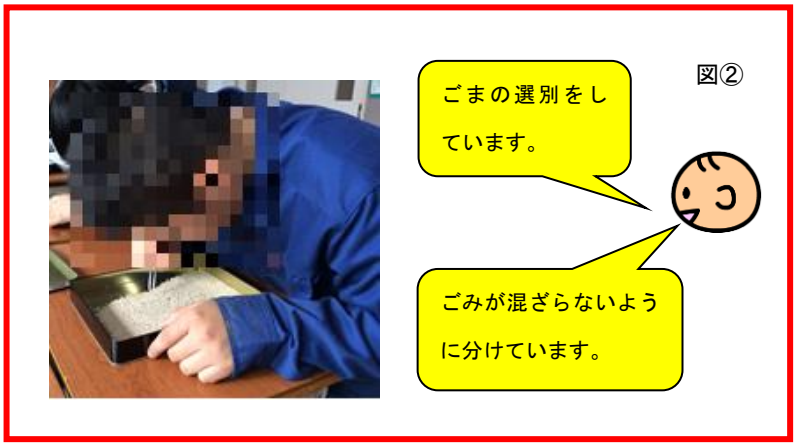
写真を撮影し，教師とやりとりすることで伝えられたという達成感や，頑張りを認めてもらえたという喜びを感じたことで，自分から伝えようとすることができるようになってきた。出来事などを相手に伝わるように言葉で伝えることが難しかったが，写真を介することで，活動を振り返りやすくなり，思い出したことを１つずつ言葉で伝えることができたのではないだろうかと考える。

２学期，３学期も作業学習の際に，写真を見ながら活動のやりとりを継続して行った。話をよく聞いて，手本をよく見て作業に取り組むことができ，２，３年生の先輩グループと一緒に活動することが多かったようである。

図①



最初のころは，誰と，いつ，どこで，何をしてきたかを聞くやりとりを行った。担任も農業について知らないことが多いので，活動内容について少し難しい質問をすると，「うーーーん…」と答えに困ってしまう様子が見られた。(図①) 作業学習のたびに教師が質問するので，「わかりません。」から「野菜を守るためです。」など，徐々に農業班で聞いたことを担任に伝えようとする姿勢が見られた。



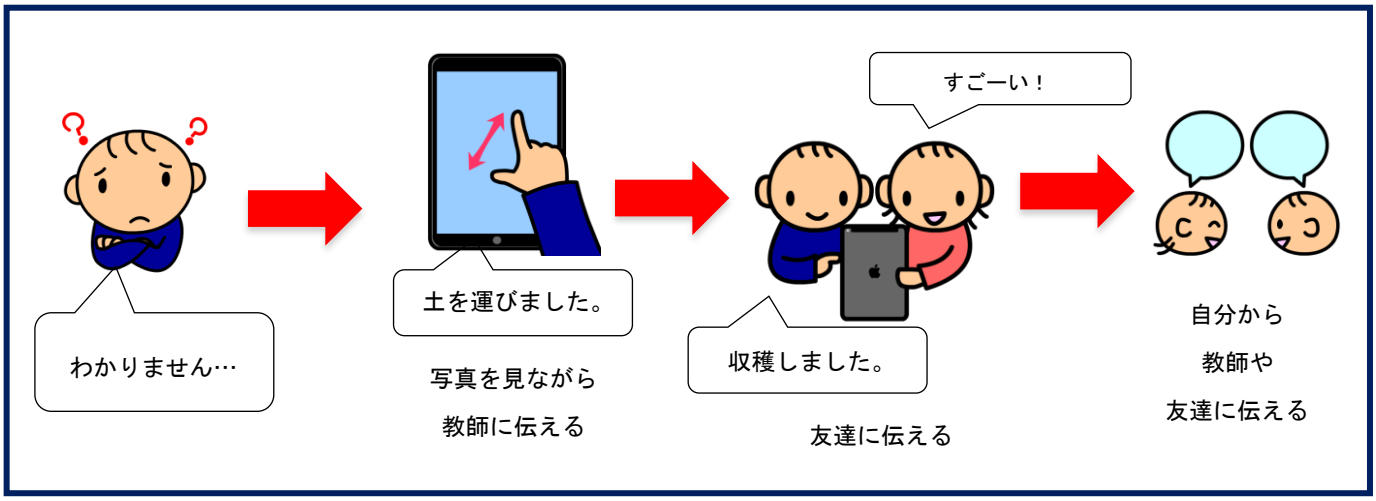
学んだことを，担任に伝えるために，農業班で話を聞き，内容を本人なりに理解したうえで，活動に参加できるようになった。写真のやりとりを通して，最初は写真を手立てとして質問に答えていた状況から，自分が優位に立って教師に教えよう，伝えようとする姿が見られた。（図②）

家庭での手伝いの様子を写真に撮影し，教師に伝える活動も行った。学校では，教師の手伝いを積極的に行っているが，家庭では自分から手伝いをすることは難しい様子であった。

「家での手伝いの様子を写真に撮影してきてね。」と伝えると，洗濯機から洗濯物を運ぶ手伝いや，布団を敷いたり，たたんだりする仕事を写真で見せてくれた。週明け褒められると，またがんばります！と意気込んでいた。（写真⑪）

写真⑪　手伝いの様子を撮影した様子

最初は，学習の様子を担任に伝えていたが，徐々に同じ学級の教師や他のクラスの教師にも伝えようとする様子が見られた。また，学級の友達に「見せて。」と言われ一緒に写真を見ることもあった。友達に「すごいね。がんばってる。」「大変な仕事してるんだね。」など褒められ，はにかんだ笑顔をうかべて嬉しそうにしていた。その後，教師や友達に，学習の様子や，家庭での様子を伝えようとする様子が見られ，自分から話すことが増えた。



○対象児の事後の変化

困り感

・言葉だけだとうまく伝えられない。
・何から話せばいいかわからない。

→

写真を活用したコミュニケーション支援

・写真を見れば活動を振り返ることができた。
・写真を見て思い出したことを話せば伝わる。

→

変化

・自分が活動したことを相手に伝えることができた。
・自分のがんばりを認めてもらえた。

実践の気づき

伝えることができた達成感
伝わったことで認めてもらえた成就感
伝えたことで困りが解決できた安心感

→

成功体験を得られるようにすることで
困り感が解決できるのでは？

※併せて自分でできた経験ができるよう，写真や手順表等を活用し視覚支援を行った。

○対象生徒の事前の状況

「写真や手順表を活用する取り組み」

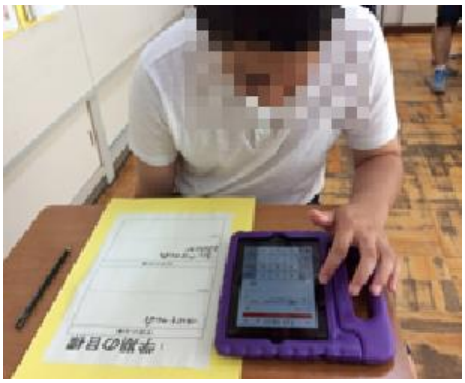
課題が難しいと思った時に，動きが止まってしまうことがある。

「伝え方を学ぶ取り組み」

使用したアプリ	使用した時間帯	実施した頻度
３秒日記	生活単元学習	目標や反省を書く際に使用

また，２学期の目標を考える際に，自分で考えて書くことが難しく動きがとまってしまう様子が見られたが，「わかりません。」と教師を呼んで伝えることができた。教師が「何をがんばりたい？」などと質問し，「作業です。」と答えるやりとりをしながら思っていることを１つずつ聞き取った。生徒Ｒが挙げた言葉をつなげて目標が書けるよう，教師が聞き取った言葉を３秒日記に追加した。「アプリを使って考えてみたら？」と提案すると，自分で考えた言葉を選んで目標を書くことができた。本人も「できました。」と自分で目標を書くことができ嬉しそうな様子であった。

文を考えることや，書くことが苦手だからやりたくないと思っていた様子だったが，３秒日記を使用すると簡単に文が作成できることで，もっと書いてみようという意識をもてるようになってきたように思う。（写真⑫）



写真⑫　３秒日記を使って
２学期の目標を考える様子

○対象生徒の事後の変化

困り感	３秒日記を活用した視覚支援	変化
・相手に伝わるような言葉を考えるのが難しい。	・言葉を選ぶだけで反省や目標が書けた。	・作った文を読めばいいから簡単だ。

○活動の具体的内容

使用したアプリ	使用した時間帯	実施した頻度
写真	生活単元学習 美術	随時使用

写真⑬　自分で写真を撮り，観察記録を書く様子

さらに，写真を撮ることで，絵を描くなどの場面でも活用することができた。美術の時間に，何もイメージがない状態で絵を描く課題を出されると，活動がとまってしまう様子が見られた。学年で育てた枝豆の観察記録を書く際に，「写真を見ながら描いてみたら？」と提案すると，「写真を撮りにいってきます。」と自分で枝豆の葉や茎を撮影してきた。写真を見ながらであれば，細部まで確認しながら描くことができた。（写真⑬）自分で観察記録を見返し，「丁寧にできた。」と満足そうな様子がみられた。

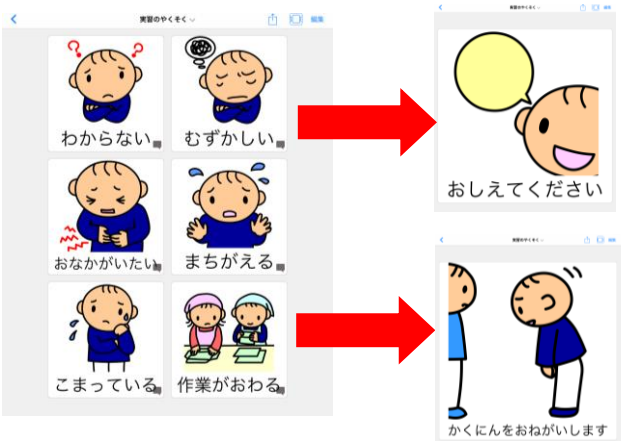
○対象生徒の事後の変化

困り感	写真を活用した視覚支援	変化
・物事を思い出しながら絵を描くことは難しい。	・写真を見れば，思い出しながら描くことができる。	・写真を見て，丁寧に描くことができた。 ・一人で進めることができた。

○活動の具体的内容

使用したアプリ	使用した時間帯	実施した頻度
DropTalk HD	生活単元学習 美術	随時使用

DropTalk HD で実習に行く際の約束をシンボルと文字で提示した。（図③）初めて施設での作業の体験を控え，事前に困ったときはどうする？」と本人とやりとりしながらイラストを繰り返し見て確認した。（写真⑭）困ったときの対応を学習したことで，施設の体験では，実習の際に筆記用具を忘れてしまったが，施設の方に忘れてしまったことを伝え，借りることができた。（写真⑮）困ったときは「〇すればよい。」ということを事前にわかっていたことで，教師以外の大人にも自分で困りを伝えるようになった。



図③　実習の約束の確認カード

写真⑭　DropTalk HD で約束を確認する様子

写真⑮　職員の方に困りを伝える様子

写真⑯　施設体験の様子

困り感

・わからないことを伝えたら怒られるかもしれない。
・どうしたらいいかわからない。

→

DropTalkHD を活用した視覚支援

・困った時にどうしたらよいかわかった。
・イラストや文字だからわかりやすい。

→

変化

・困りを伝えることができた。
・困りが解決できたのでその後の活動がスムーズにできた。

〇活動の具体的内容

使用したアプリ	使用した時間帯	実施した頻度
Microsoft office Power point	美術	随時使用
You Tube	美術	随時使用

「作業の流れを確認する手順表の活用」

手順表を活用し，自分から教師に助言を求たりするなど，困りを解決できる経験を積む。

美術の時間に「何を描けばいいかわからない。思いつかない。」と動きが止まってしまったことが多いので，本人がわかるようにMicrosoft office PowerPointで手順を確認したり，動画で手順を示し，自分で確認しながら進められるように支援した。（写真⑰）イラストでいくつか作品の例を提示しておくと，その中から自分で描きたいものを選び描くことができた。また，生徒用タブレットにMicrosoft office PowerPointのスライドを入れておくと，見ながら 1 人で作業を進めようとする姿が見られた。わからないときには，「教えてください。」と教師に伝え，手本を見せるなどして易しく伝えるようにした。また，墨絵や絵手紙の学習の際に，youtube に生徒がわかるような描き方の動画を全体指導の場で提示した。わからない時には個別に動画を提示しようと考えていたが，描き方のイメージがもてたようで，筆や道具の扱い方や，色の濃さの調整の方法も知ることができ，最初から最後まで一人で仕上げることができた。手順表に合わせて，動画を示すことで作品を仕上げる手順をより理解でき，視覚支援を手立てとしながら製作することができた。

写真⑰　手順表としたスライドの一部　イラストと文字があるとわかりやすいようである。

〇対象生徒の事後の変化

困り感

・何を描いたらいいかわからない。
・説明を一度聞いただけでは手順を覚えられない。

→

Microsoft office Power Point
Youtube を活用した
視覚支援

・手順表のイラスト，文字を見ればわかりやすい。
・動画を繰り返し見れば手順が確認できる。

→

変化

・手順表を見ながら進めることができた。
・動画を見て，作品をつくる工程がわかり，イメージがもちやすかった。

実践の気づき

自分でできた達成感
自分の取り組みを認められる成就感
一人で進められる安心感

→

成功体験を得られるようにすることで
困り感が解決できるのでは？

【報告者の気づきとエビデンス】

主観的気づき：伝える場面での安心感を得られるような支援をすることで，本人が抱える困り感を解消できるのではないか？

気づきに関するエビデンス

面談で保護者から相談があった

学校では頑張っている様ですが，家での手伝いはあまりしてくれません。

休みの日に手伝いした様子を，写真で撮ってきて先生に見せてね。

わかりました。

手伝いについて写真を見ながら教師に伝える様子

いつ手伝いをしたの？

うーんと…土曜日の朝で

はい…次も頑張ります。

きれいにたためてるね。
お母さんも助かっただろね。

手伝い直後に SNS を使って自ら教師に報告

今日の朝も布団たたみをやりました！

意欲 UP

他の場面でも「写真撮ってきます！」と自ら学習に活用しようとする様子が見られるようになった。
写真や SNS の活用で，「これがあればできる！」と自信がついたり，認められる機会が増え，意欲が向上した。

～自分の思いを伝えたことで～

当初は，自分が困った状況になると黙ってやり過ごしてしまう様子が見られたが，２学期後半には，給食の配膳中に他の学級のおぼんを誤って割ってしまった際に，「誰が割ったの？」と聞かれ「ぼくがやりました。」と正直に答えることができた。

自分から困った時に教師に助けを求めたり，忘れ物や失敗しても，報告することができるようになった。

日々の積み重ねにより，自分の思いを伝えた方が困りが早く解決することがわかってきたようである。わからないことがあった際には，すぐに教師に質問することができるようになった。こうしたこともあり，がんばりが認められ表彰された。（写真⑱）

写真⑱　２学期のがんばりが認められ終業式で表彰される様子

～進路について～

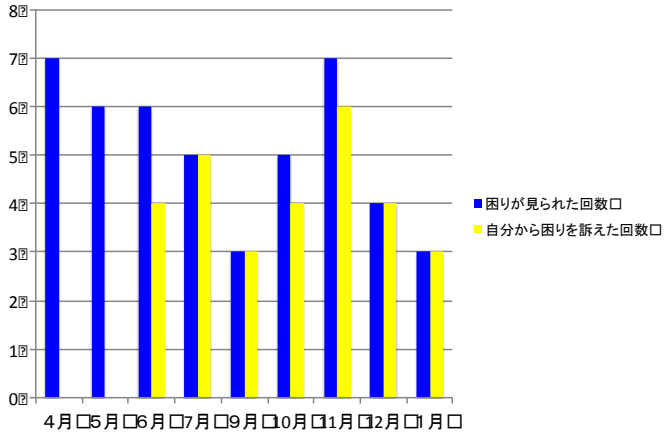
集中を切らさず，丁寧に作業をしたり，指示をよく聞いて仕事に取り組んだりすることができた。質問や報告を自分から行うことができるようになった。入学当初の実態から，進路先は福祉就労を考えていたが，来年度の実習では，一般就労を目指し，スーパーマーケットや飲食店などの企業で実習することも考えてみてはどうか？と進路指導から提案があった。本人は「お寿司屋さんで働きたい。」という気持ちがあるようなので，実習を重ね，本人や保護者と相談しながら，本人の望む進路先を見つけられるように支援をしていきたい。
実習の決意集会でも自分の思いを伝えることができた。（写真⑲）

写真⑲　実習の決意集会の様子

【困りを訴えた頻度と推移（表①）】

担任が一緒だった時間に見られた困りの様子のグラフである。生活単元学習や美術，発表する時や忘れ物をしたときに黙ってうつむいてしまうことがあった。４月，５月は介入前なので，困る様子が見られた数が最も多い。例えば，学期や実習の目標を決める際に書きたいことがわからず鉛筆が止まってしまったり，美術で描くものが決められず，下をむいたまま授業の時間が過ぎてしまったりすることがあった。また，教師が「どうしたの？」と言葉をかけても何も言わないことがあり，顔を背けてしまうこともあった。

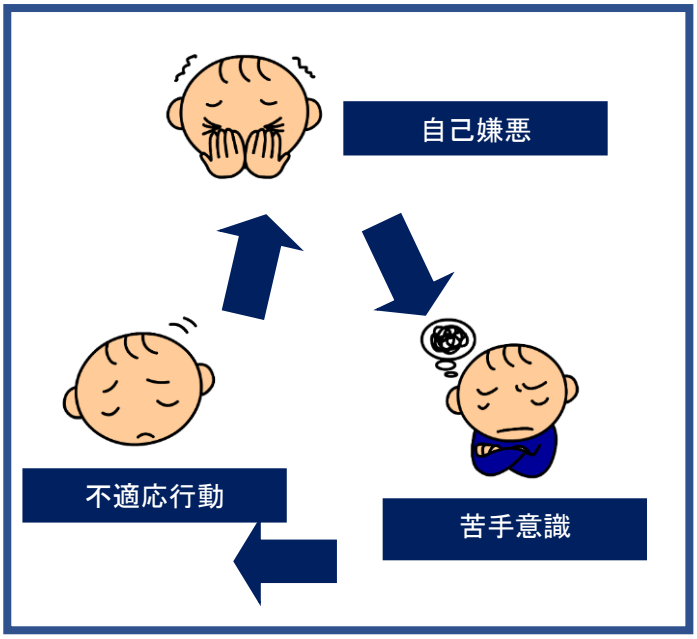
表①　困りが見られた回数と自分から困りを訴えた回数

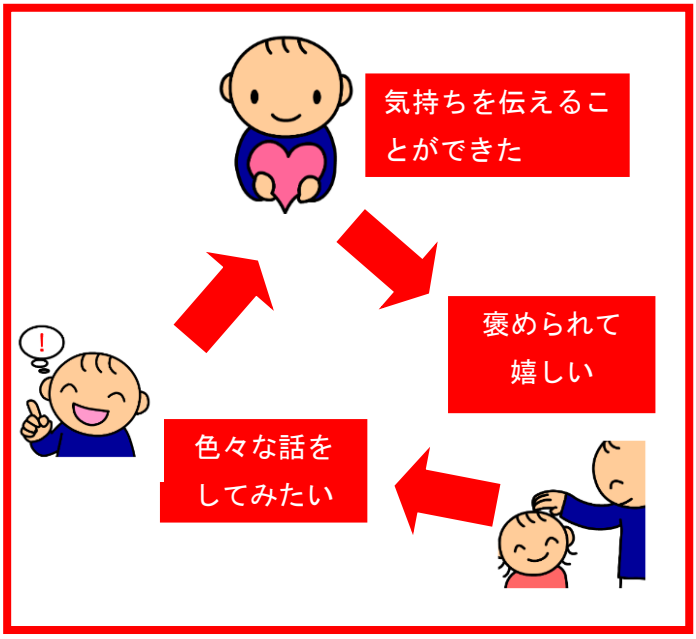


６月から介入を始め，DropTalkHD を使って，困りを伝えるやりとりを行った。最初は，生活単元学習と，美術の時間に絞ってヘルプボタンを使用した。生徒の抵抗なく，導入することができ，自分が困ったときにボタンを押すことができた。同時に，言葉で思いを伝えられるように練習を重ねていき，９月には口頭で「わかりません。」「教えてください。」と学級の担任に言えるようになった。その為，10 月以降は，同学年，他学年の教師にも口頭で困りを伝えることができるようになった。11 月は行事が多く，文化祭や校外学習があり，事前学習等でわからないことがあると「教えてください。」と自分から伝えることができた。１月以降は，視覚支援を行ったことも併せて，教師に困りを訴える頻度が減ってきている。

【まとめ】

コミュニケーション支援，視覚支援が相互に作用し，生徒が気持ちを伝えやすい環境を整えることができた。今後も支援を継続し安心感がもてるような環境で生活できるようにしていく。





【今後に向けて】

〇高等部卒業まで残り2年の学校生活に向けて

今年度１年間の取り組みを通して，認められた経験がたくさんできたことで，自信をもって学習に取り組むことができるようになった。しかし，自分が行ったことのない活動に関しては未だ消極的な姿勢が見える。２月に生徒会選挙があったので，「生徒会の仕事はやってみたい？」と聞くと，「難しそうだから…」と言っていた。ただ，同じ学級で役員に立候補した生徒の責任者として，給食の時間に各教室をまわり選挙活動をしたり，演説会では，責任者として高等部生徒の前で立候補者の応援演説をしたりすることができた。責任をもって自分の仕事を行うことができ，コミュニケーションに広がりがでてきたことから，学校の中心となる仕事にも挑戦してほしいと考える。今年度が終わるまで，日々の生活から生徒のがんばりを称賛するなどし，自信がもてるような支援を継続していきたい。また，次年度に引き継ぎたいと考える。

〇自力通学に向けて

現在，自宅からスクールバス停まで徒歩で登校しているが，今後は自宅から学校まで，公共の交通機関を利用した通学ができるよう保護者の方と連携しながら練習の計画を立てていきたい。将来に向けて本人の活動の範囲が広がるように，視覚支援等で安全面をしっかりと伝えながら前向きに取り組めるような支援をしたい。

〇進路に向けて

卒業後，望む進路先に就労するためにはどのような力をつけるべきか，次年度へ向けて対象生徒と話しながら考えていきたい。また，安心して仕事ができる環境が整えられるよう，必要なコミュニケーション支援や視覚支援がある場合には，行ってもらえるよう福祉施設や企業等に伝えられるようにしたい。対象生徒が夢に向かって努力することを担任として応援していきたい。